

第5章 動物・植物に係る調査結果

第1節 動物相（鳥類相）

第1項 調査概要

施設の供用による周辺動物相への影響を把握するため、評価書の事後調査計画に示したとおり環境の変化に敏感に反応すると考えられる種群で、定量的な調査方法がほぼ確立されており、環境の変化が数値として把握できると考えられる鳥類を対象に、調査を実施しました。

なお、本調査は施設供用後より実施するもので、今年度が第1回目となります。今後、同調査は平成26年度、平成27年度、平成29年度に実施し、その結果を比較していきます。

1-1 調査日時及び調査内容

調査は表5-1-1に示したとおり、春季と冬季の2回実施しました。

なお、本調査は平成26年度より春季の1回とします。

表5-1-1 鳥類相調査年月日

調査時期	調査日	調査時間
春季	平成25年5月21日	6:00～8:00
冬季	平成25年12月25日	7:00～9:00

1-2 調査方法

調査は予め設定した踏査ルートを、時速2km程度の速さで踏査し、片側25m（両側で50m）の範囲に出現する種及び個体数を記録しました。

なお、調査には8～10倍程度の双眼鏡を用いました。

1-3 調査地点

調査に使用した踏査ルートは図5-1-1に示した2ルートとしました。

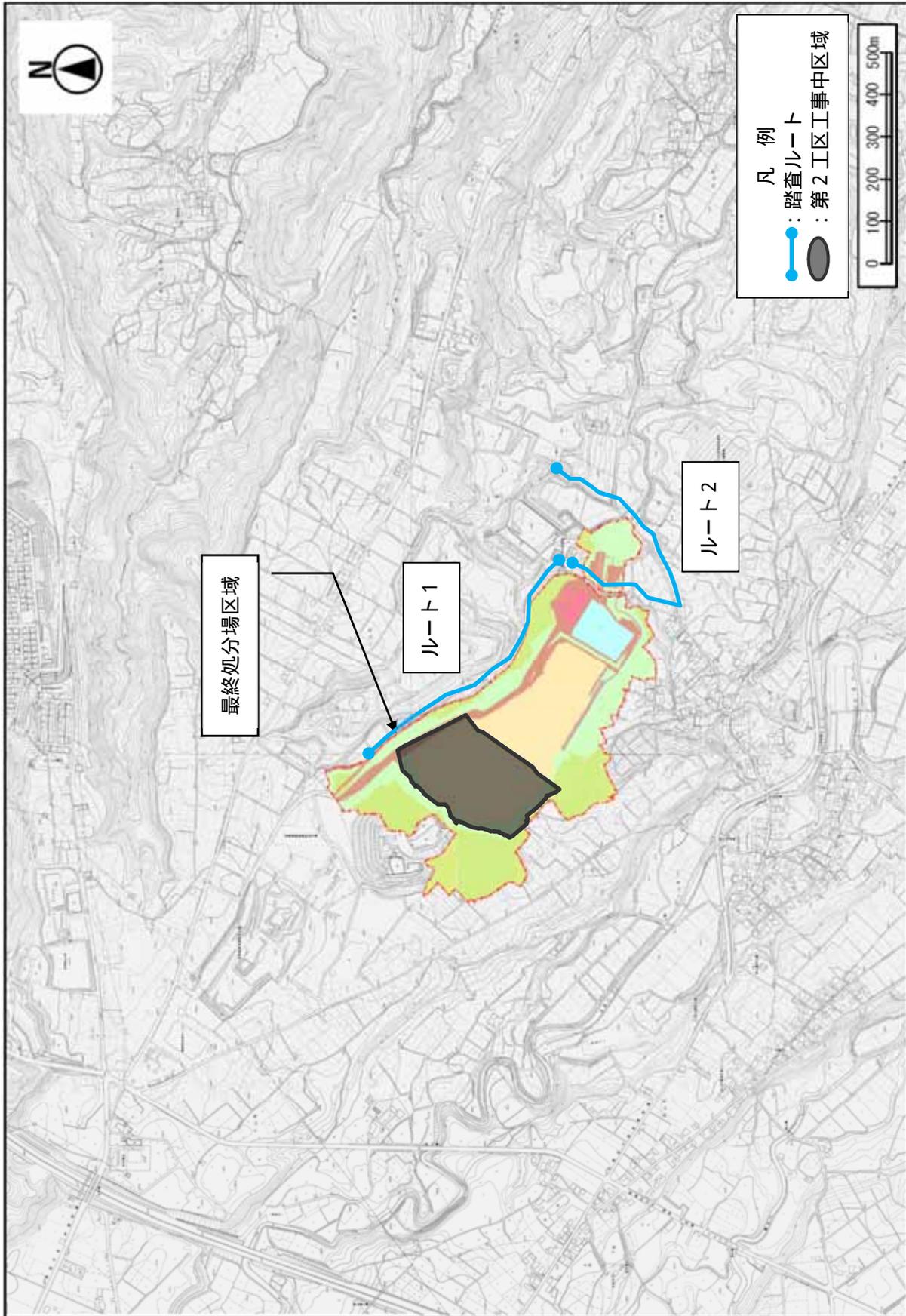


図5-1-1-1 鳥類相踏査ルート

第2項 調査結果

調査の結果、確認した鳥類は表5 - 1 - 2に示したとおり、キジ、コガモ等 10目 23科 28種の鳥類を確認しました。確認した種は、当該地域の環境（里山環境）を反映して、低地から低山地にかけて普通にみられる種で構成されていました。

調査結果の詳細は表5 - 1 - 3に示したとおりであり、春季はルート1がキジ、キジバト等 13種 23個体、ルート2がコチドリ、ハシボソガラス等 12種 36個体、冬季はルート1がキジバト、カワウ等 11種 109個体、ルート2がコガモ、アオサギ等 15種 73個体と、種数では季節・踏査ルートに関係なく概ね同定でしたが、個体数では春季は少なく、冬季は多い状況でした。また、冬季のルート1で個体数が多くなりましたが、冬季は基本的期に越冬個体の渡来が多くなることから個体数が増えることと、当該施設の北側に隣接する処分場に多くのカラス類が生息していることから、これらを確認したことによる差と考えられます。

表5 - 1 - 2 鳥類相調査結果

目	科	種名	学名	渡り区分	春季	冬季
1	キジ	キジ	<i>Phasianus colchicus robustipes</i>	留鳥		
2	カモ	コガモ	<i>Anas crecca crecca</i>	冬鳥		
3	ハト	キジバト	<i>Streptopelia orientalis orientalis</i>	留鳥		
4	カツオドリ	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo hanedae</i>	留鳥		
5	ペリカン	アオサギ	<i>Ardea cinerea jouyi</i>	留鳥		
6	カッコウ	ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>	夏鳥		
7	チドリ	コチドリ	<i>Charadrius dubius curonicus</i>	夏鳥		
8	ブッポウソウ	カワセミ	<i>Alcedo atthis bengalensis</i>	留鳥		
9	キツツキ	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki nippon</i>	留鳥		
10	スズメ	モズ	<i>Lanius bucephalus bucephalus</i>	留鳥		
11		カラス	ハシボソガラス	<i>Corvus corone orientalis</i>	留鳥	
12			ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos japonensis</i>	留鳥	
13		シジュウカラ	シジュウカラ	<i>Parus minor minor</i>	留鳥	
14		ヒバリ	ヒバリ	<i>Alauda arvensis japonica</i>	留鳥	
15		ツバメ	ツバメ	<i>Hirundo rustica gutturalis</i>	夏鳥	
16		ヒヨドリ	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis aurotis</i>	留鳥	
17		ウグイス	ウグイス	<i>Cettia diphone cantans</i>	留鳥	
18		メジロ	メジロ	<i>Zosterops japonicus japonicus</i>	留鳥	
19		ムクドリ	ムクドリ	<i>Spodiopsar cineraceus</i>	留鳥	
20		ヒタキ	シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	冬鳥	
21			ツグミ	<i>Turdus naumanni eunomus</i>	冬鳥	
22		スズメ	スズメ	<i>Passer montanus saturatus</i>	留鳥	
23		セキレイ	セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>	留鳥	
24		アトリ	カワラヒワ	<i>Chloris sinica minor</i>	留鳥	
25			シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes japonicus</i>	冬鳥	
26			イカル	<i>Eophona personata personata</i>	留鳥	
27		ホオジロ	ホオジロ	<i>Emberiza cioides ciopsis</i>	留鳥	
28			アオジ	<i>Emberiza spodocephala personata</i>	冬鳥	
10目23科28種				留鳥 20種 冬鳥 5種 夏鳥 3種	17種	20種

注1) 種名、学名等の分類情報及び配列順は、「日本鳥類目録 改訂第7版」(2012年、日本鳥学会)に準拠した。

注2) 渡り区分は、「三重県立博物館研究報告 自然科学第1号 三重県の鳥類相」(昭和54年、三重県立博物館)を参考に、昨今の県内での確認状況を踏まえ修正した。また、記載のない種については、「日本鳥類目録 改訂第7版」(2012年、日本鳥学会)を参考にした。

表 5 - 1 - 3 (1) 鳥類相調査結果 (春季)

目	科	種名	学名	渡り区分	ルート 1	ルート 2	
1	キジ	キジ	<i>Phasianus colchicus robustipes</i>	留鳥	1	1	
2	ハト	キジバト	<i>Streptopelia orientalis orientalis</i>	留鳥	2	6	
3	カッコウ	ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>	夏鳥	1		
4	チドリ	コチドリ	<i>Charadrius dubius curonicus</i>	夏鳥		2	
5	キツツキ	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki nippon</i>	留鳥	1		
6	スズメ	カラス	ハシボソガラス	<i>Corvus corone orientalis</i>	留鳥	1	1
7			ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos japonensis</i>	留鳥	4	1
8		ヒバリ	<i>Alauda arvensis japonica</i>	留鳥	1	4	
9		ツバメ	<i>Hirundo rustica gutturalis</i>	夏鳥		2	
10		ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis aurotis</i>	留鳥	4		
11		ウグイス	<i>Cettia diphone cantans</i>	留鳥	2	1	
12		メジロ	<i>Zosterops japonicus japonicus</i>	留鳥	2		
13		スズメ	<i>Passer montanus saturatus</i>	留鳥	2	12	
14		セキレイ	セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>	留鳥		2
15		アトリ	カワラヒワ	<i>Chloris sinica minor</i>	留鳥	1	3
16			イカル	<i>Eophona personata personata</i>	留鳥		1
17			ホオジロ	<i>Emberiza cioides ciopsis</i>	留鳥	1	
6目15科17種				留鳥 14種 夏鳥 3種	13種 23個体	12種 36個体	

注 1) 種名、学名等の分類情報及び配列順は、「日本鳥類目録 改訂第 7 版」(2012 年、日本鳥学会) に準拠した。

注 2) 渡り区分は、「三重県立博物館研究報告 自然科学第 1 号 三重県の鳥類相」(昭和 54 年、三重県立博物館) を参考に、昨今の県内での確認状況を踏まえ修正した。また、記載のない種については、「日本鳥類目録 改訂第 7 版」(2012 年、日本鳥学会) を参考にした。

表 5 - 1 - 3 (2) 鳥類相調査結果 (冬季)

目	科	種名	学名	渡り区分	ルート 1	ルート 2	
1	カモ	コガモ	<i>Anas crecca crecca</i>	冬鳥		1	
2	ハト	キジバト	<i>Streptopelia orientalis orientalis</i>	留鳥	8	3	
3	カツオドリ	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo hanedae</i>	留鳥	2	2	
4	ベリカン	サギ	<i>Ardea cinerea jouyi</i>	留鳥		1	
5	ブッポウソウ	カワセミ	<i>Alcedo atthis bengalensis</i>	留鳥		1	
6	スズメ	モズ	<i>Lanius bucephalus bucephalus</i>	留鳥		1	
7		カラス	ハシボソガラス	<i>Corvus corone orientalis</i>	留鳥	21	6
8			ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos japonensis</i>	留鳥	27	
9		シジュウカラ	<i>Parus minor minor</i>	留鳥	1		
10		ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis aurotis</i>	留鳥	21	10	
11		メジロ	<i>Zosterops japonicus japonicus</i>	留鳥		6	
12		ムクドリ	<i>Spodiopsar cineraceus</i>	留鳥	23	17	
13		ヒタキ	シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	冬鳥	2	
14			ツグミ	<i>Turdus naumanni eunomus</i>	冬鳥	1	
15		スズメ	<i>Passer montanus saturatus</i>	留鳥		4	
16		アトリ	カワラヒワ	<i>Chloris sinica minor</i>	留鳥		7
17			シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes japonicus</i>	冬鳥		2
18			イカル	<i>Eophona personata personata</i>	留鳥		10
19		ホオジロ	ホオジロ	<i>Emberiza cioides ciopsis</i>	留鳥	1	2
20	アオジ		<i>Emberiza spodocephala personata</i>	冬鳥	2		
6目15科20種				留鳥 15種 冬鳥 5種	11種 109個体	15種 73個体	

注 1) 種名、学名等の分類情報及び配列順は、「日本鳥類目録 改訂第 7 版」(2012 年、日本鳥学会) に準拠した。

注 2) 渡り区分は、「三重県立博物館研究報告 自然科学第 1 号 三重県の鳥類相」(昭和 54 年、三重県立博物館) を参考に、昨今の県内での確認状況を踏まえ修正した。また、記載のない種については、「日本鳥類目録 改訂第 7 版」(2012 年、日本鳥学会) を参考にした。

第2節 特筆すべき動物

第1項 調査概要

評価書の現況調査時に生息を確認した特筆すべき種について、事業実施後の生息状況を把握するために調査を実施しました。

第2項 オオタカ・ハイタカ

2-1 調査日時及び調査内容

調査は表5-2-1に示したとおり、平成25年4月及び平成26年1月から3月にかけて毎月1回実施しました。

表5-2-1 調査日時及び調査内容

調査回	調査日	調査時間	調査内容
第1回	平成25年4月19日	6:00~13:00	生息確認調査
第2回	平成26年1月22日	7:00~13:00	
第3回	平成26年2月20日	6:30~13:00	
第4回	平成26年3月22日	6:30~13:00	

2-2 調査地点

調査地点は図5-2-1に示したとおりであり、最終処分場区域及びその周辺を広く見渡せる2地点で実施しました。

2-3 調査方法

調査は定点観察(8倍程度の双眼鏡及び25~30倍程度の望遠鏡を使用)により行い、オオタカ及びハイタカの飛翔が確認された場合は無線機を用いて調査員間で連絡を取り合い、行動をより詳細に把握することとしました。

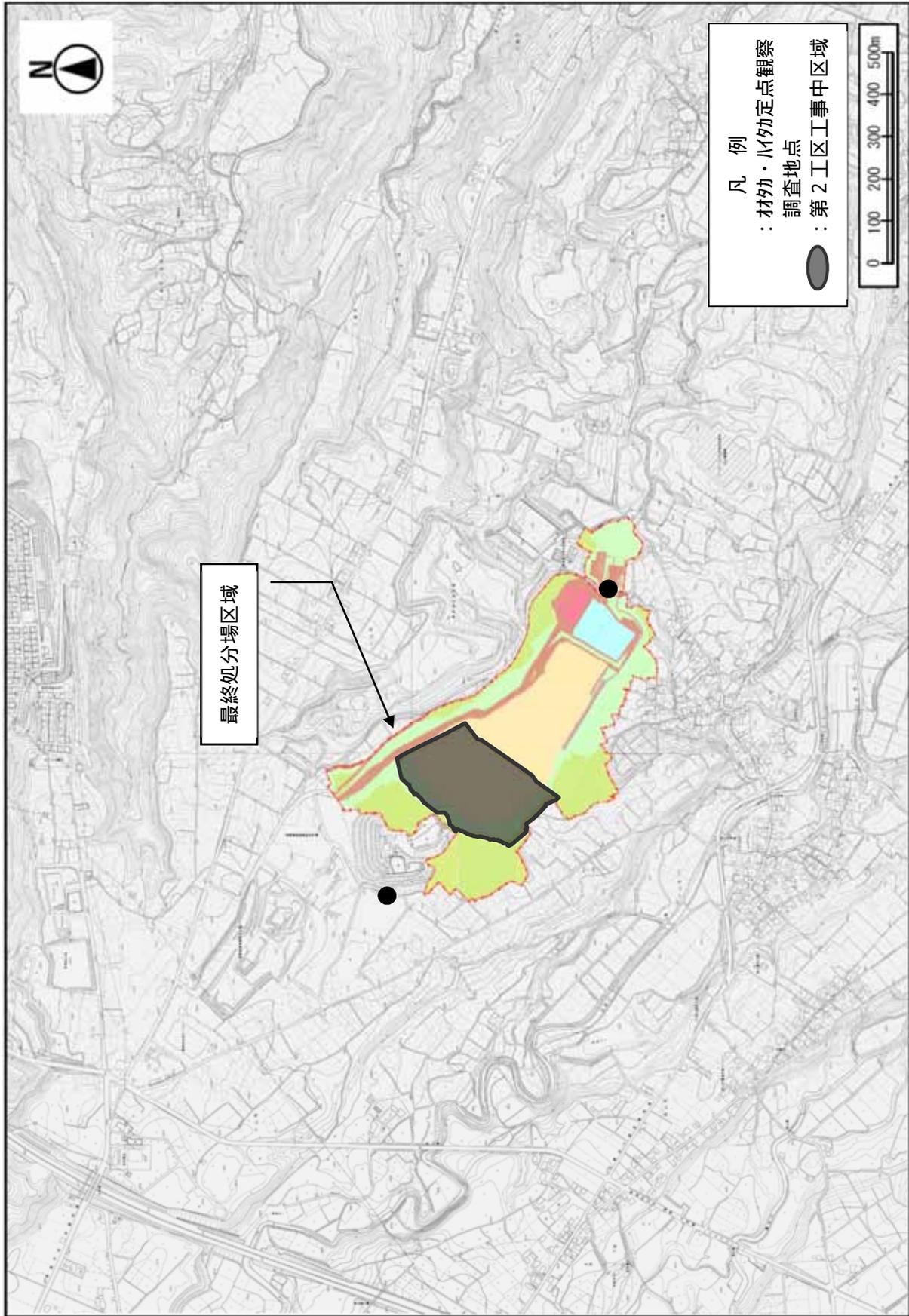


図5-2-2-1 オオタカ・ハイトカ調査地点

2 - 4 調査結果

調査の結果、オオタカ、ハイタカは確認されませんでした。

2 - 5 まとめ

調査の結果、調査対象としたオオタカ、ハイタカは確認されませんでした。

最終処分場区域内は平成 24 年 12 月の一部施設供用後も引き続き建設工事が進んでおり、重機等が稼働している状況であることと、その北側に位置する四日市市南部埋立処分場を餌場として利用しているハシブトガラス及びハシボソガラスが本地域周辺に多数生息していることなどから、本地域はオオタカ、ハイタカ等の猛禽類の採餌行動範囲の一部となる可能性はありますが、繁殖等の主要な生息地には適さない環境であると考えられます。

第3項 チュウサギ・サンショウクイ・タゲリ・サシバ等

3 - 1 調査年月日及び調査内容

調査は表5 - 2 - 2に示したとおり、渡り鳥として確認される可能性のあるサシバ等、夏鳥であるチュウサギ、サンショウクイを7月に、冬鳥であるタゲリを12月に、夜行性の種であるアオバズクを7月の夜間に実施しました。

表5 - 2 - 2 調査年月日及び調査内容

調査対象種	調査年月日	調査内容
チュウサギ サンショウクイ サシバ コチドリ コマドリ キビタキ	平成25年7月5日	任意観察調査
タゲリ	平成25年12月25日	
アオバズク	平成25年7月5日 (夜間)	

3 - 2 調査範囲及び調査方法

調査範囲は図5 - 2 - 2に示したとおり、最終処分場区域及びその周辺とし、調査範囲内を任意に踏査する任意観察法により実施しました。

3 - 3 調査結果

調査の結果、調査対象8種(チュウサギ・サンショウクイ・サシバ・コチドリ・コマドリ・キビタキ・タゲリ・アオバズク)の確認はできませんでした。

しかし、5月に実施した鳥類相調査時にコチドリ1個体を図5 - 2 - 3に示した最終処分場区域内及び東側の水田で確認しました。

3 - 4 まとめ

最終処分場区域内は平成24年12月の一部施設供用後も引き続き建設工事が進んでおり、当該地域内におけるこれらの種の生息環境は、一部の樹林性の種(コマドリ、キビタキ等)の生息環境を除き消失していると考えられます。

したがって、今後は樹林性以外の種は最終処分場の周辺区域に移動するものと考えられ、また、樹林性の種についても最終処分場区域内の樹林のまとまりが少なくなっていることを考慮すると、周辺地域を主な生息地として、偶然的に飛来することがある程度と考えられます。

今回確認したコチドリについても、主要な生息地は中流域から下流域の礫質の河川区域であるため、今後も周辺の水田や河川を採餌場所として利用しているのが確認される程度と考えられます。

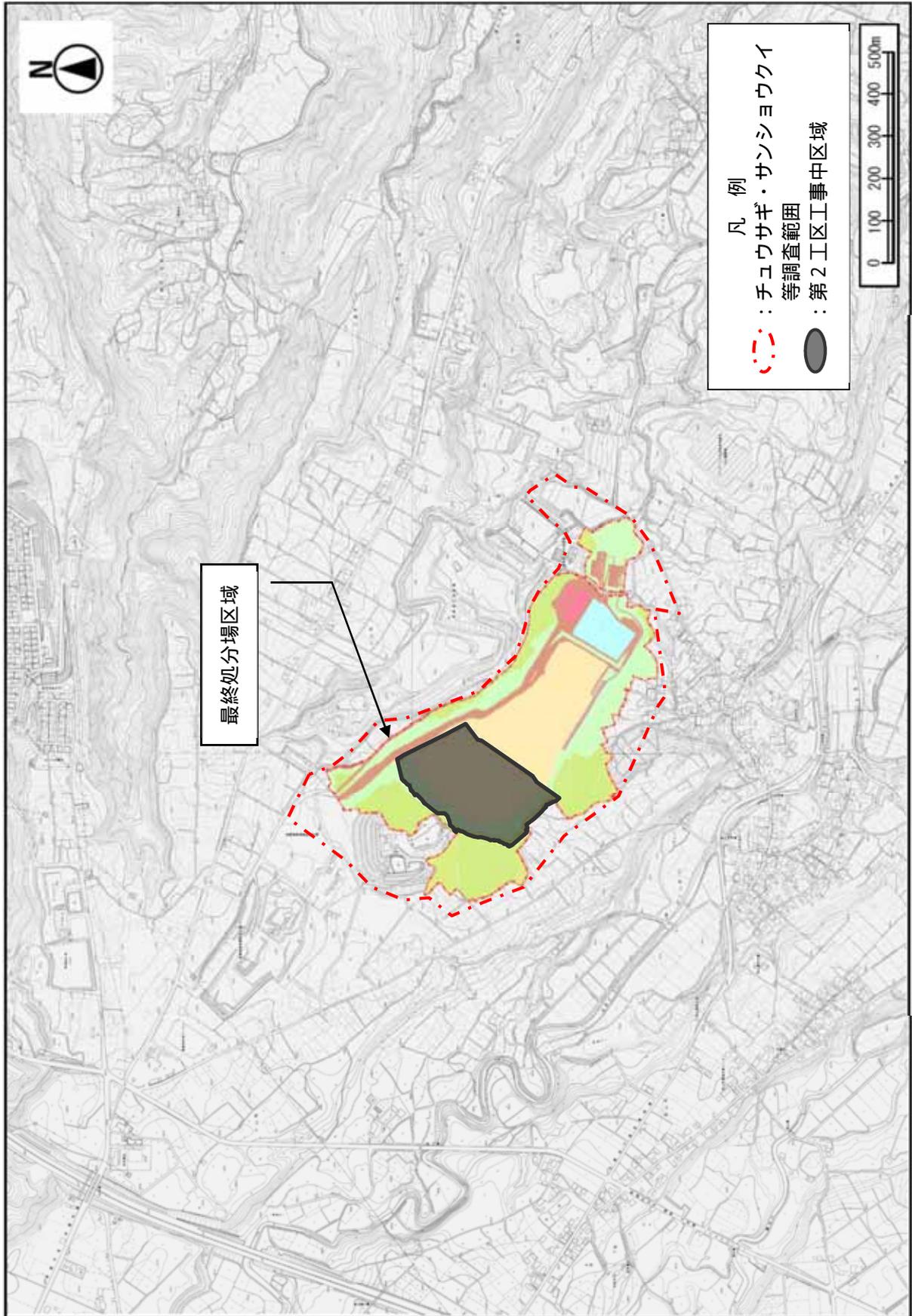


図5-2-2-2 チュウウサギ・サンシヨウクワイ等調査範囲

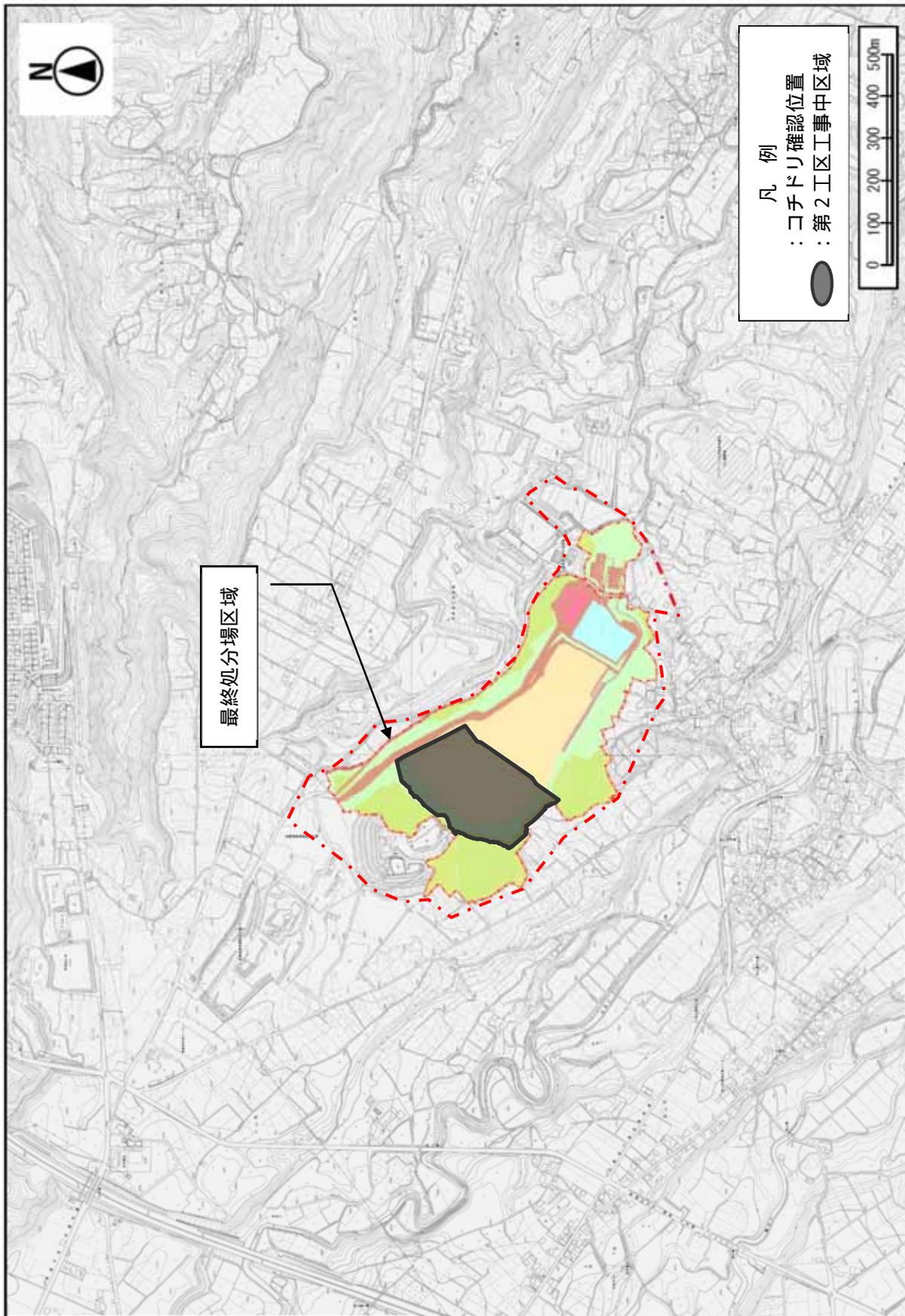


図5-2-2-3 コチドリ確認位置

第4項 フクロウ

4 - 1 調査日時及び調査内容

調査は表5 - 2 - 3に示したとおり、平成25年4月及び平成26年1月から3月にかけて毎月1回実施しました。

表5 - 2 - 3 調査日時及び調査内容

調査回	調査日	調査時間	調査内容
第1回	平成25年4月25日	17:00～21:00	生息確認調査
第2回	平成26年1月20日	17:00～21:00	
第3回	平成26年2月25日	17:00～21:00	
第4回	平成26年3月19日	17:00～21:00	

4 - 2 調査範囲

調査範囲は図5 - 2 - 4に示したとおりであり、評価書における現況調査で本種の飛翔等を確認した場所を中心にして、最終処分場区域及びその周辺で実施しました。

4 - 3 調査方法

調査は夜間に実施し、調査範囲内を任意に踏査する任意観察により実施しました。

4 - 4 調査結果

調査の結果、本種の鳴き声をはじめ、生息を確認することはできませんでした。

4 - 5 まとめ

最終処分場区域内は平成24年12月の一部施設供用後も引き続き建設工事が進んでおり、重機等が稼働している状況であることと、その北側に位置する四日市市南部埋立処分場を餌場として利用しているハシブトガラス及びハシボソガラスが本地域周辺に多数生息している状況です。

また、最終処分場区域及びその周辺の森林には、本種の繁殖地となる樹洞のあるような大径木はみられないことから、本地域は本種の採餌行動範囲の一部となる可能性はありますが、繁殖等の主要な生息地には適さない環境であると考えられます。

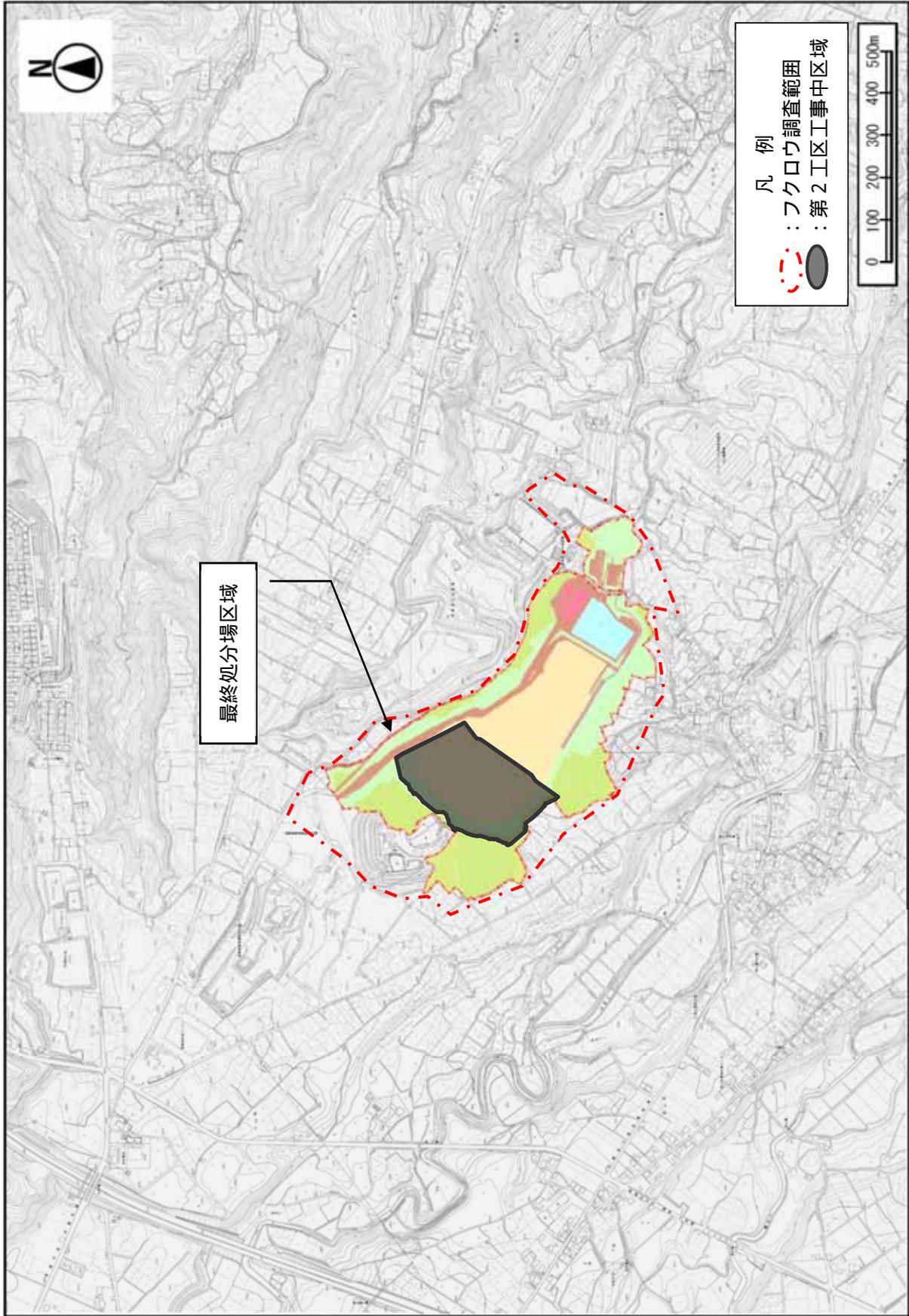


図5 - 2 - 4 フクロウ調査範囲

第5項 アカハライモリ・ニホンイシガメ

5 - 1 調査年月日及び調査内容

調査年月日及び調査内容は表5 - 2 - 4に示したとおりです。

表5 - 2 - 4 調査年月日及び調査内容

分類	調査対象種	調査年月日	調査内容
両生類	アカハライモリ	平成25年8月28日、29日	生息確認調査
爬虫類	ニホンイシガメ		

5 - 2 調査範囲

調査範囲は図5 - 2 - 5に示したとおりであり、最終処分場区域及びその周辺で実施しました。

5 - 3 調査方法

調査は調査範囲内を任意に踏査する任意観察により実施しました。

5 - 4 調査結果

調査の結果、本種を対象とした調査では、アカハライモリ、ニホンイシガメとも生息の確認はできませんでした。

しかし、7月に実施した水生生物調査時及び2月に実施した淡水魚類調査時にそれぞれ1ヶ所でニホンイシガメを各1個体確認しました。

確認地点は図5 - 2 - 6に示したとおりです。

5 - 5 まとめ

最終処分場区域内は平成24年12月の一部施設供用後も引き続き建設工事が進んでおり、最終処分場区域内には当該種の生息環境は消失し、生息していた個体は一時的に周辺に退避しているものと考えられます。

最終処分場の供用後には東側に調整池等が整備され、ニホンイシガメ及び今回確認できなかったアカハライモリの生息環境が創出される計画であることから、両種とも再び当該地域を生息地として利用することが可能になるものと考えられます。

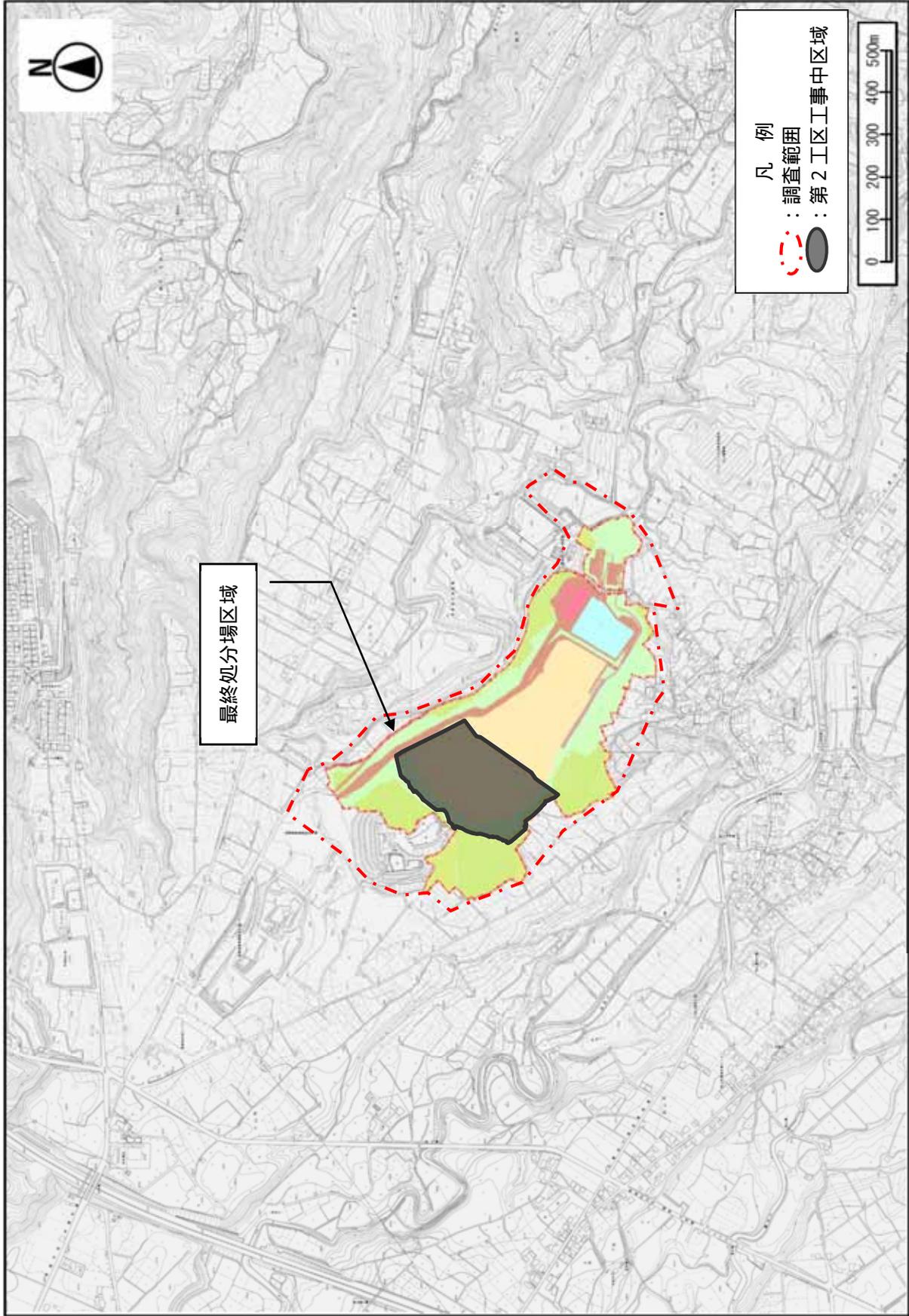


図5 - 2 - 5 アカハライモリ・ニホンイシガメ調査範囲

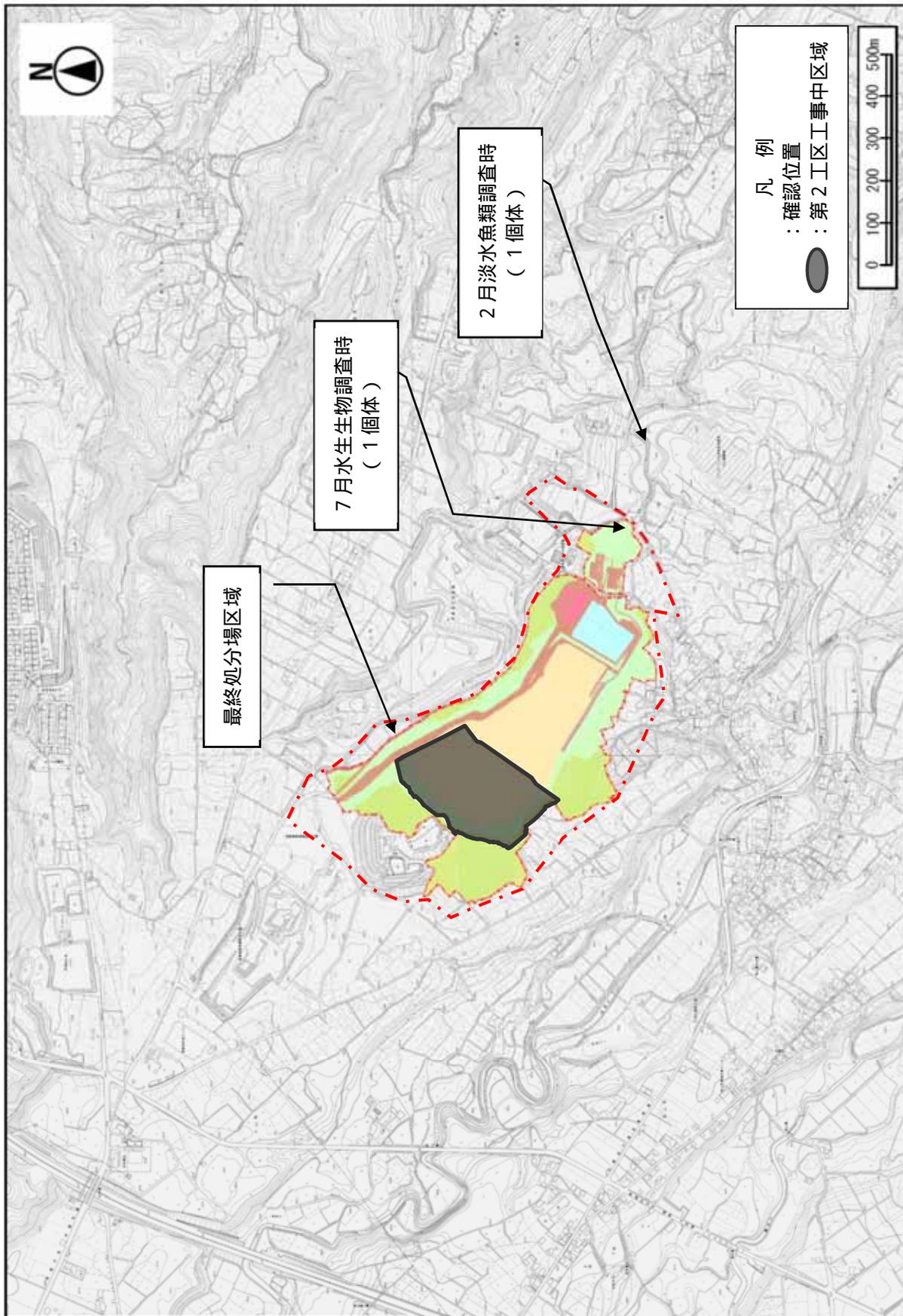


図5-2-6 ニホインシガメ確認位置

第6項 ムカシヤンマ・オオクワガタ・コガネグモ等

6 - 1 調査年月日及び調査内容

調査年月日及び調査内容は表5 - 2 - 5に示したとおりです。

表5 - 2 - 5 調査年月日及び調査内容

分類	調査対象種	調査年月日	調査内容
昆虫類	ムカシヤンマ オオクワガタ ミカドガガンボ ミズアブ オオイシアブ アオメアブ	平成 25 年 8 月 28 日、 29 日	生息確認調査
クモ類	コガネグモ カワベコモリグモ アシナガカニグモ		
陸産貝類	ヒラベッコウガイ ヒメビロウドマイマイ		

6 - 2 調査範囲

調査範囲は図5 - 2 - 7に示したとおりであり、評価書における現況調査で本種を確認した場所を中心にして、最終処分場区域及びその周辺で実施しました。

6 - 3 調査方法

調査は調査範囲内を任意に踏査する任意観察により実施しました。

なお、クモ類については、任意観察調査の他、地上徘徊性の種を対象としたベイトトラップ(誘引餌を入れたプラスチックコップを地中に埋め、1晩放置した後、翌朝回収)による調査も実施しました。

6 - 4 調査結果

調査の結果、調査対象としたムカシヤンマ等 11 種のうち、図5 - 2 - 8に示したとおりアオメアブを 1ヶ所で 2 個体、コガネグモを 1ヶ所で 1 個体確認しました。

その他の 9 種は確認できませんでした。

6 - 5 まとめ

今回の調査では、調査対象 11 種のうち、アオメアブとコガネグモの 2 種の生息を確認しましたが、最終処分場区域内は平成 24 年 12 月の一部施設供用後も引き続き建設工事が進んでおり、最終処分場区域内にはこれらの種の生息環境は消失していることから、移動能力の高い種は一時的に周辺に退避しているものと考えられます。

最終処分場の供用後には残存緑地や最終処分場東側に整備される調整池等の水辺環境等にこれらの種の生息環境が整備される計画であることから、少しずつ確認される種が増えていくものと考えられます。

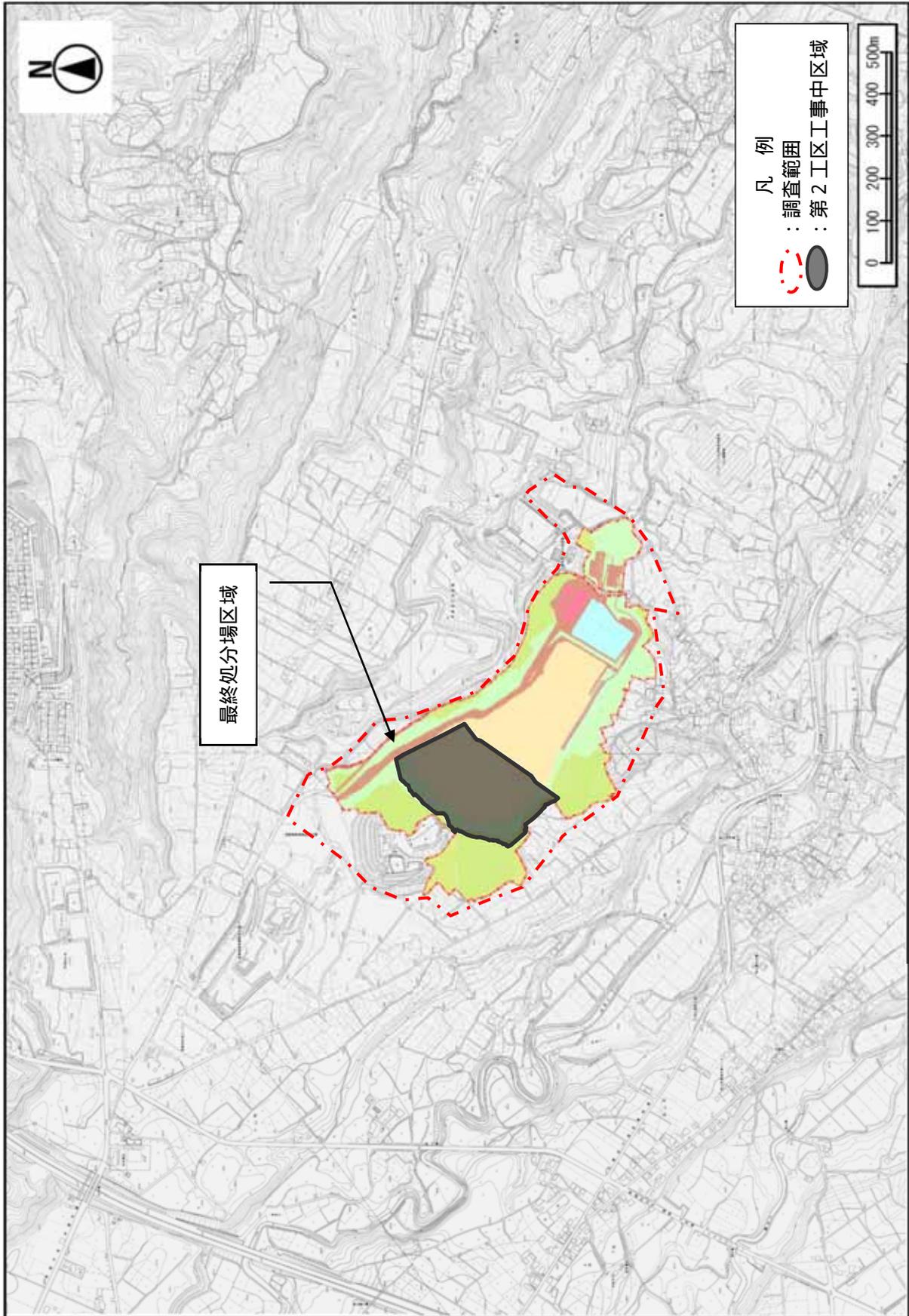


図5-2-7 ムカシヤマ等調査範囲

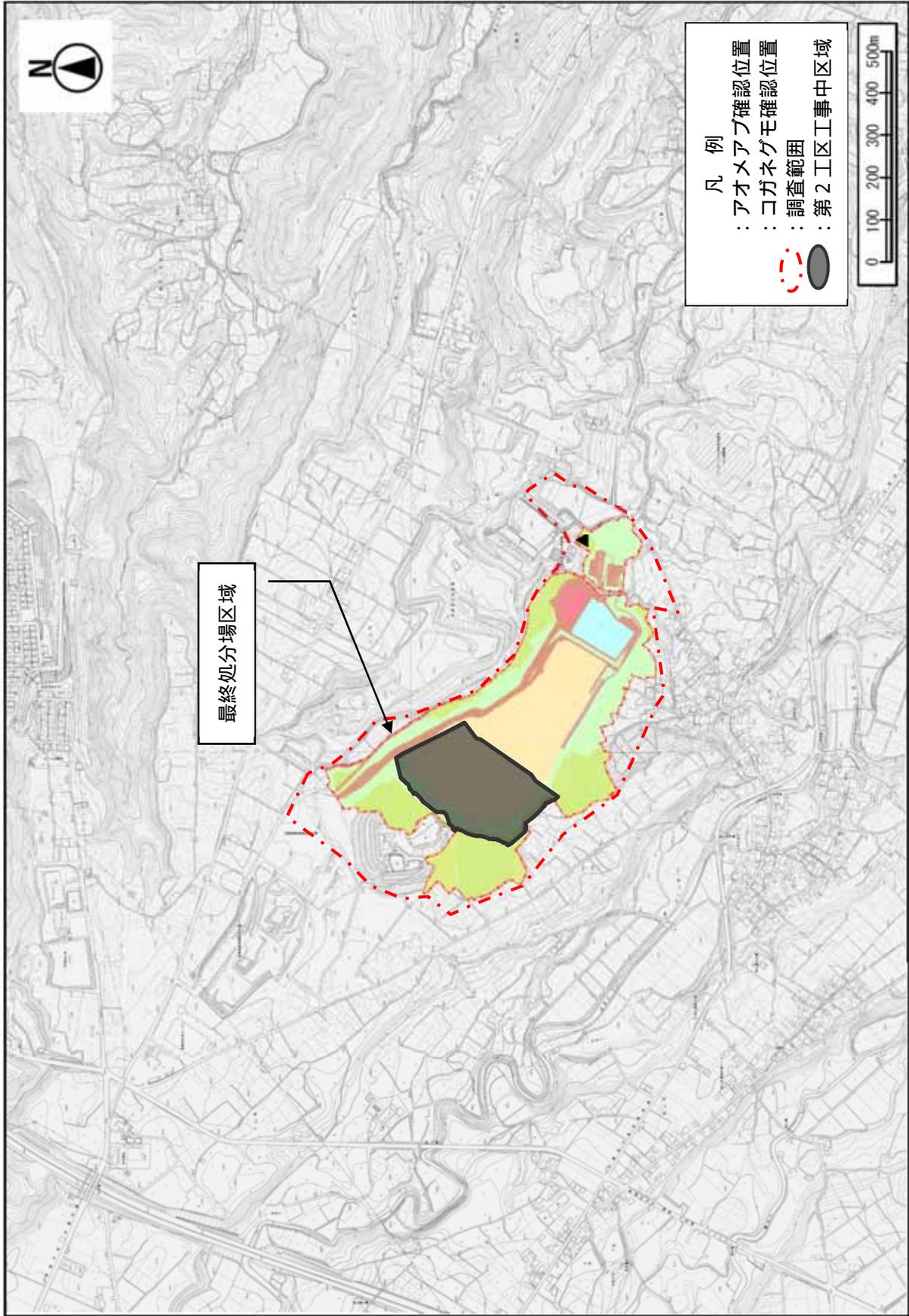


図5-2-8 アオメアブ、コガネグモ確認位置

第3節 水生生物

第1項 調査概要

評価書の現況調査時に生息を確認した水生生物のうちの特筆すべき種について、事業実施後の生息状況を把握するために調査を実施しました。

また、評価書の現況調査時より確認を続けている淡水魚類の生息状況についても調査を実施しました。

第2項 特筆すべき水生生物

2 - 1 調査年月日及び調査内容

調査年月日及び調査内容は表5 - 3 - 1に示したとおりです。

表5 - 3 - 1 調査年月日及び調査内容

調査対象種	調査年月日	調査内容
ヒラマキミズマイマイ ヒラマキガイモドキ ナガオカモノアラガイ マシジミ ドブシジミ コオイムシ	平成25年7月8日	生息確認調査

2 - 2 調査場所

調査は評価書の調査で実施した天白川の調査地点で実施しました。

調査地点は図5 - 3 - 1に示したとおりです。

2 - 3 調査方法

調査は調査地点周辺を任意に踏査する任意観察により行い、対象種の確認に努めました。

2 - 4 調査結果

調査の結果、ヒラマキガイモドキをSt.4、5の2地点で、マシジミをSt.2～5、7の5地点で、ドブシジミをSt.5、7の2地点で確認しました。

確認地点は図5 - 3 - 2に示したとおりです。

2 - 5 まとめ

調査の結果、調査対象とした6種(ヒラマキミズマイマイ、マシジミ、コオイムシ等)のうち、ヒラマキガイモドキ、マシジミ、ドブシジミの3種の生息を確認しました。

最終処分場建設工事の進捗を受けて、当該区域近辺の生息個体は天白川水域を下流側へ移動する等して当該地域周辺では見られなくなる可能性があります。しかし最終処分場供用後、天白川の水環境が安定すれば再びこれら水生生物の生息環境も回復し、下流へ移動した個体もゆっくりと戻ってくることを期待されるものと考えられます。

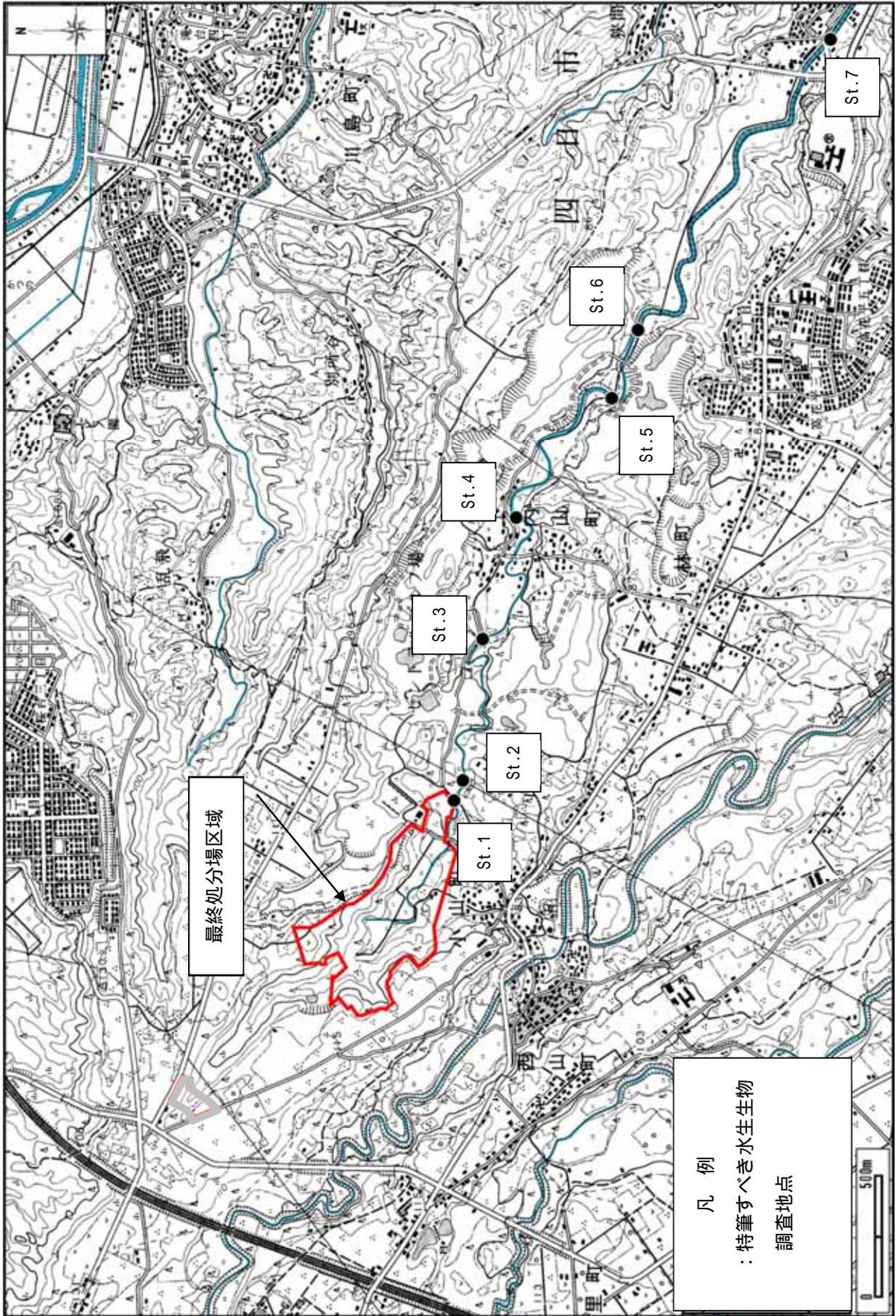


図 5 - 3 - 1 特筆すべき水生生物調査地点

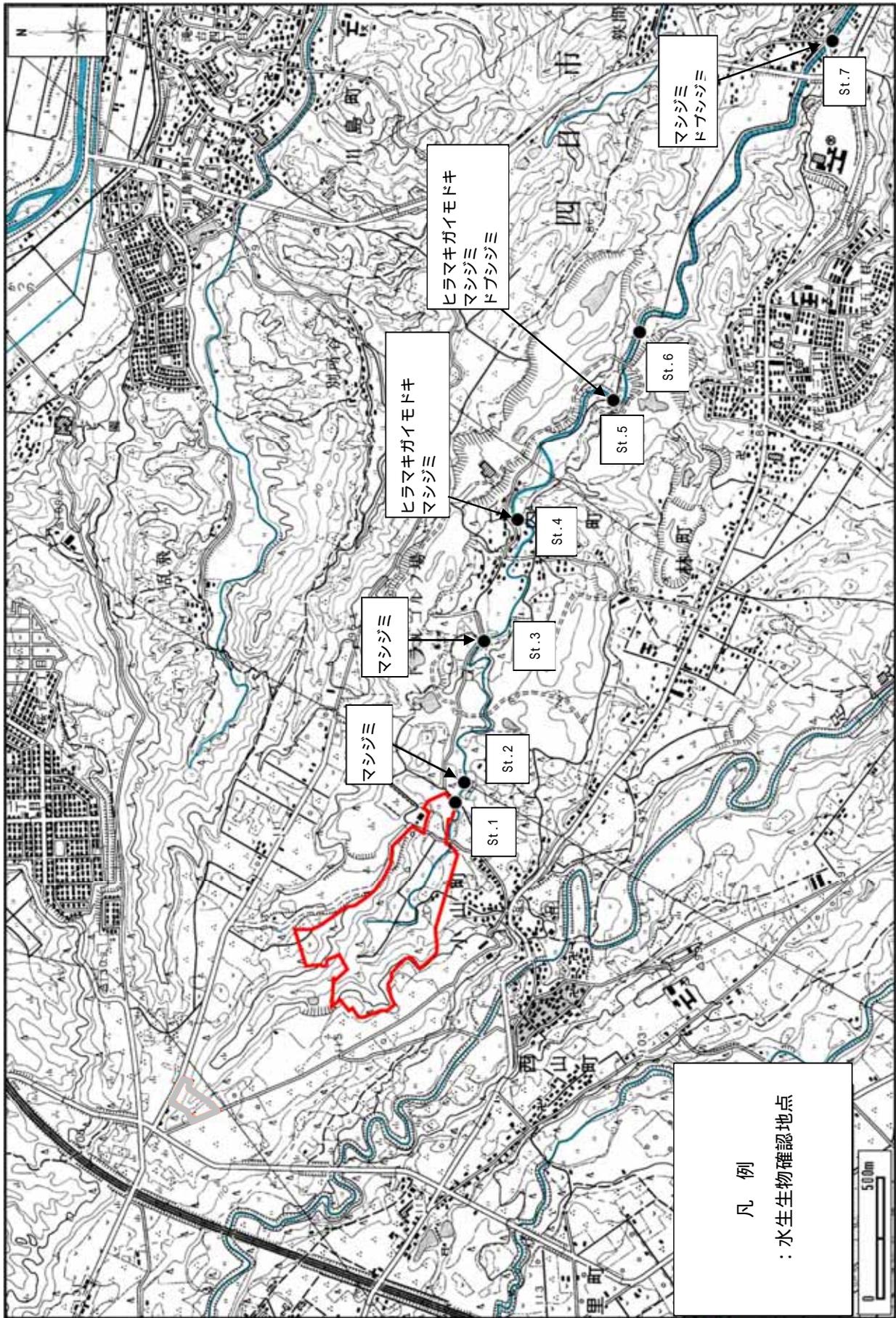


図 5 - 3 - 2 特筆すべき水生生物確認位置

第3項 淡水魚類

3 - 1 調査年月日及び調査内容

調査年月日及び調査内容は表5 - 3 - 2に示したとおりです。

表5 - 3 - 2 調査年月日及び調査内容

調査時季	調査年月日	調査内容
春季	平成25年 5月15日	捕獲調査、 目視観察調査、 任意調査
夏季	平成25年 8月 7日	
秋季	平成25年11月 5日	
冬季	平成26年 2月 5日	

3 - 2 調査地点

調査は図5 - 3 - 3に示した3地点(P.1、P.2、P.3)で実施しました。

3 - 3 調査方法

3 - 3 - 1 捕獲調査

調査地点にカゴ網、セルビン各2個を設置して採集し、生息種の捕獲・確認を行いました。
カゴ網、セルビンは1時間設置し、餌として市販の練餌及びサナギ粉を用いました。

3 - 3 - 2 目視観察調査

岸辺や橋上から目視により観察を行い、生息種の確認を行いました。

3 - 3 - 3 任意調査

上記の調査方法に加え、調査地点周辺においてタモ網を用いて任意に採集し、生息種の確認をする任意調査も実施しました。

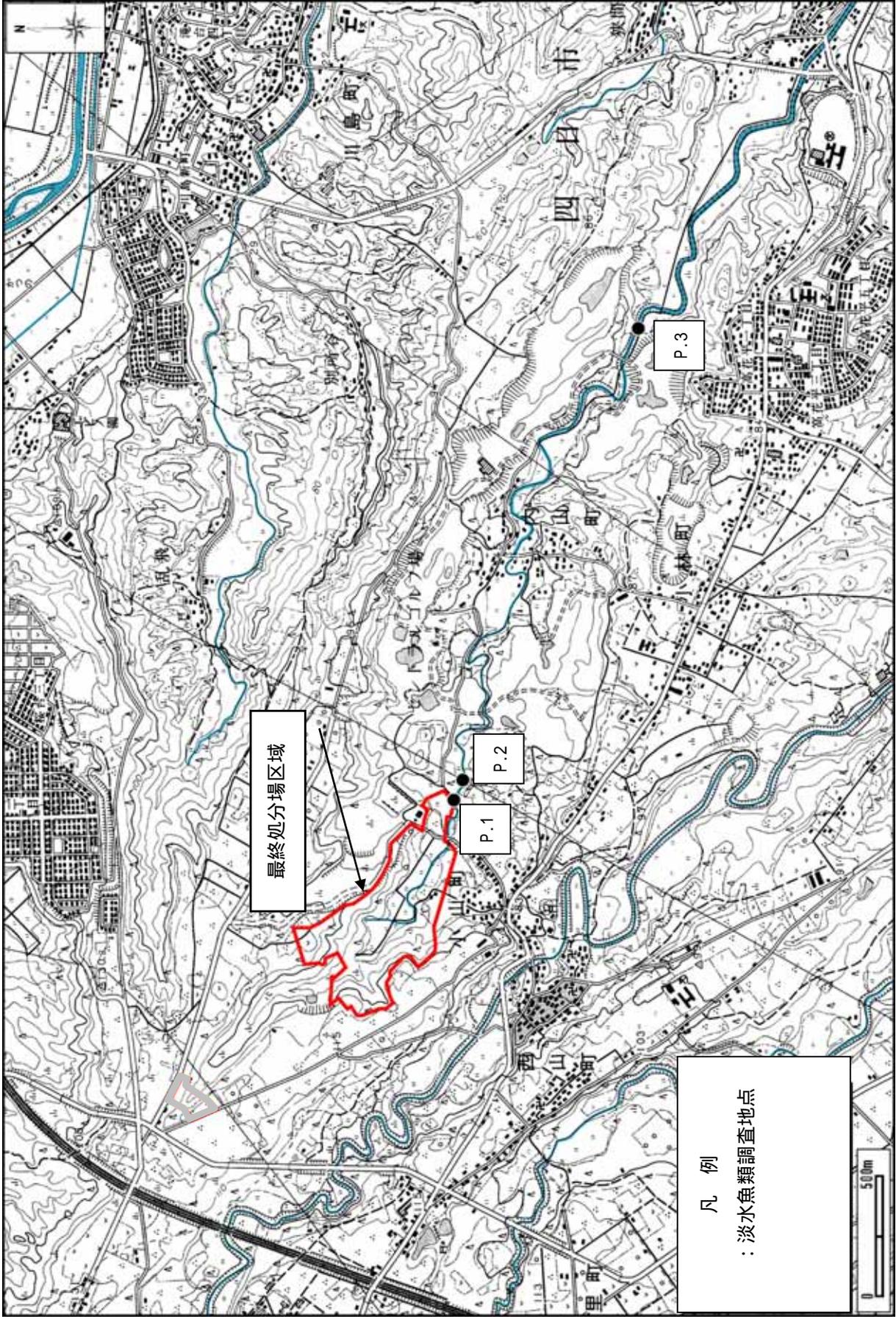


图 5 - 3 - 3 淡水魚類調査地点

3 - 4 調査結果

3 - 4 - 1 捕獲調査・任意調査結果

カゴ網、セルピンによる捕獲調査及びタモ網による任意調査により、表5 - 3 - 3に示したとおりギンブナ、オイカワ、カワムツ、タモロコ、モツゴ、ドジョウ、カワヨシノボリの7種の淡水魚類を確認しました。

カゴ網による調査では、春季はP.2でオイカワ、カワヨシノボリの2種を、夏季はP.3でモツゴ、タモロコの2種を、秋季はP.2でオイカワ1種を、冬季はP.3でオイカワ1種を捕獲しました。

セルピンによる調査では、春季はP.3でオイカワ1種を、夏季はP.3でタモロコ1種を、秋季はP.3でカワムツ1種を、冬季はP.3でオイカワ1種を捕獲しました。

タモ網による任意調査では、P.1の春季以外は各地点・各季に1～5種を確認しました。

全体的にP.2、P.3では4種から7種を確認していますが、P.1は2種と他の地点と比べやや貧弱な魚類相となっていると考えられます。

表5 - 3 - 3(1) 魚類捕獲調査結果

調査方法	種名	春季(H25.5.15)			夏季(H25.8.7)			
		調査地点						
		P.1	P.2	P.3	P.1	P.2	P.3	
カゴ網	オイカワ	捕獲なし	2	捕獲なし	捕獲なし			
	モツゴ							1
	タモロコ							5
	カワヨシノボリ		1					
	種数		2					2
	個体数		3					6
セルピン	オイカワ	捕獲なし		1	捕獲なし			
	タモロコ							9
	種数			1				1
	個体数			1				9
タモ網	ギンブナ	捕獲なし						
	オイカワ							
	カワムツ							
	タモロコ							
	ドジョウ							
	カワヨシノボリ							
	種数		4	2	1	3	5	

注：タモ網による捕獲個体数は、その作業量に比例して多くなるため、種類のみ確認とした。

表5 - 3 - 3 (2) 魚類捕獲調査結果

調査方法	種名	秋季(H25.11.5)			冬季(H26.2.5)		
		調査地点					
		P.1	P.2	P.3	P.1	P.2	P.3
カゴ網	オイカワ	捕獲なし	1	捕獲なし	捕獲なし	捕獲なし	6
	種数		1				1
	個体数		1				6
セルビン	オイカワ	捕獲なし	捕獲なし		捕獲なし	捕獲なし	1
	カワムツ			3			
	種数			1			1
	個体数			3			1
タモ網	オイカワ						
	カワムツ						
	タモロコ						
	カワヨシノボリ						
	種数	1	3	2	2	3	4

注：タモ網による捕獲個体数は、その作業量に比例して多くなるため、種類のみ確認とした。

3 - 4 - 2 目視観察調査結果

各季に実施した調査では、各地点とも魚影を確認することはできませんでした。

3 - 5 まとめ

調査の結果、表5 - 3 - 4に示したとおり、2目3科7種の淡水魚類を確認しました。
季節別では夏季が6種と多く、地点別では、P.1が2種、P.2が4種、P.3が7種でした。

表5 - 3 - 4 魚類捕獲調査結果（確認種）

目名	科名	種名	調査時季				調査地点		
			春季	夏季	秋季	冬季	P.1	P.2	P.3
コイ	コイ	ギンプナ							
		オイカワ							
		カワムツ							
		モツゴ							
		タモロコ							
	ドジョウ	ドジョウ							
スズキ	ハゼ	カワヨシノボリ							
2目3科7種		種数	4	6	3	4	2	4	7

また、今回の調査結果を、表5 - 3 - 5に示した昨年度（平成24年度）の調査結果と比べてみると、季節別・地点別とも、概ね昨年度と同様の結果でした。

確認種についても昨年度と同じ種を確認しており、当該水域に生息する魚類相に大きな変化はみられませんでした。

表5 - 3 - 5 魚類捕獲調査結果（確認種：平成24年度の調査）

目名	科名	種名	調査時季				調査地点		
			春季	夏季	秋季	冬季	P.1	P.2	P.3
コイ	コイ	ギンプナ							
		オイカワ							
		カワムツ							
		モツゴ							
		タモロコ							
	ドジョウ	ドジョウ							
スズキ	ハゼ	カワヨシノボリ							
2目3科7種		種数	3	6	4	3	3	4	6

第4節 植物相

第1項 調査概要

事業実施区域周辺の残存緑地について、事業の実施による影響の有無を把握するため調査を実施しました。また、回復緑地の緑化状況についても調査を実施しました。

なお、本調査は施設供用後より実施するもので、今年度が第1回目となります。今後、同調査を継続して実施し、その結果を比較していきます。

1 - 1 調査年月日及び調査内容

調査年月日及び調査内容は表5 - 4 - 1に示したとおりです。

表5 - 4 - 1 調査年月日及び調査内容

調査対象種	調査年月日	調査内容
残存緑地 回復緑地	平成 25 年 11 月 11 日	生育状況調査

1 - 2 調査場所

調査地点は図5 - 4 - 1に示したとおりです。

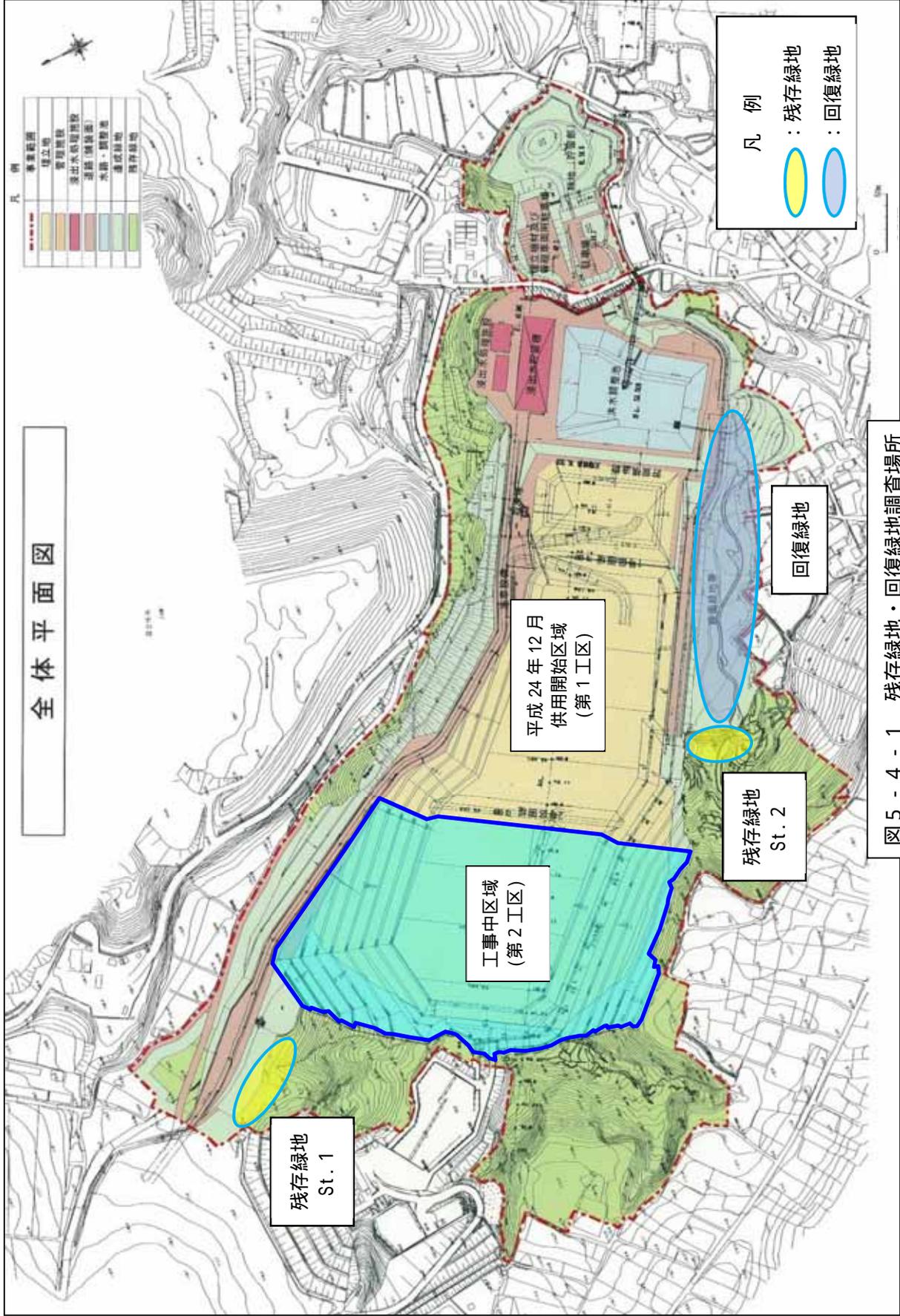
1 - 3 調査方法

残存緑地の調査は、定点を設定して、その地点から写真撮影を行い、その状況を監視していきます。

回復緑地については、植栽樹の中から任意の個体（図5 - 4 - 2参照）を選定し、その個体について表5 - 4 - 2に示した活力度の判定基準に基づき、簡易的に樹木活力度を把握しました。

表5 - 4 - 2 樹木活力度の判定基準

項目	<判定基準>			
	← 良好な状態		不良な状態 →	
活力度	1 正常な開花や良好な枝葉、樹勢等、旺盛な生育状況を示し、被害がまったくみられない	2 開花状況や枝葉、樹勢等にわずかに異常がみられ、幾分被害の影響を受けているがあまり目立たない	3 開花状況や枝葉、樹勢等に異常が明らかに認められる	4 生育の状態が劣悪で回復の見込みがない



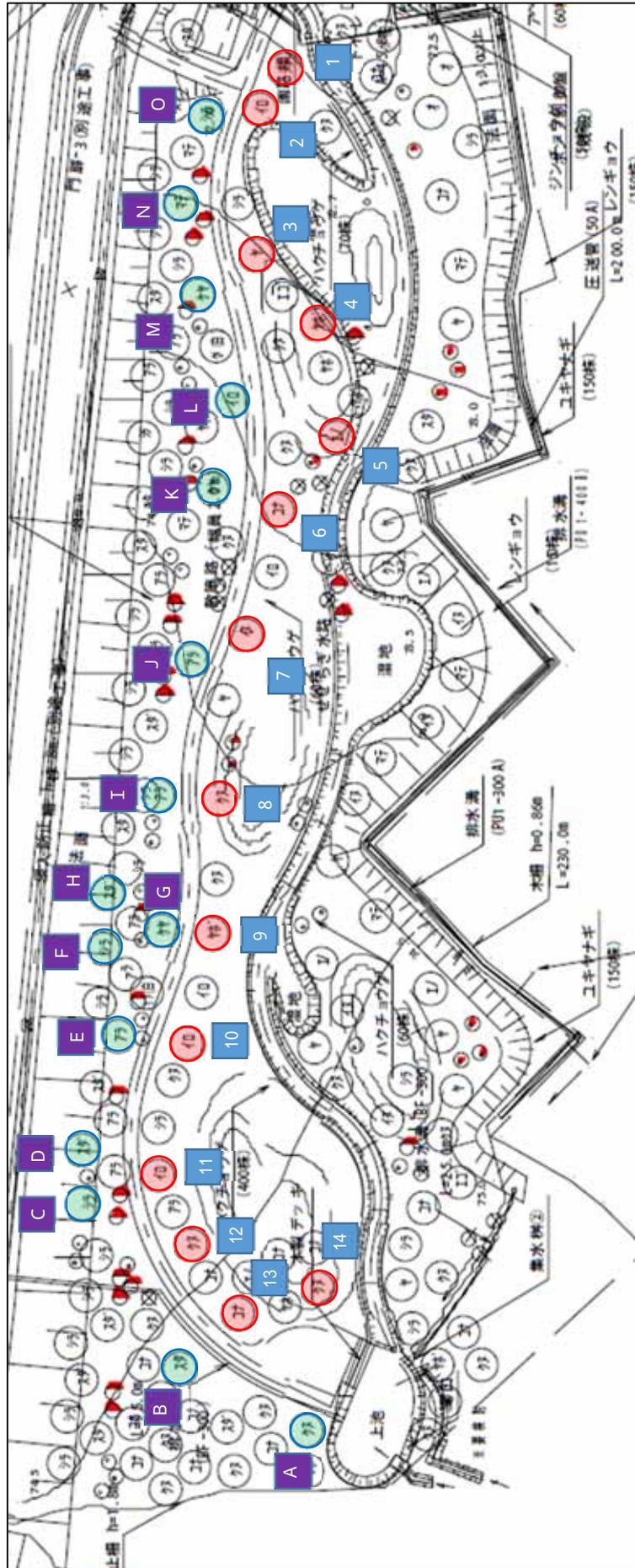


図5-4-4-2 回復緑地のうち調査対象とした種

第2項 調査結果

2 - 1 残存緑地

設定した2か所の残存緑地について調査1年目の状況を写真5 - 4 - 1 ~ 2に示しました。

St.1では、高木層としてコナラ、ソヨゴ、カクレミノ、タブノキが、低木層としてヒサカキ、クロバイ、アラカシ、ネザサ、アセビ、ヤブニッケイの生育がみられました。

St.2では、高木層としてタブノキ、カクレミノ、マダケ、シロダモ、アラカシが、低木層としてアオキ、ネムノキ、ハゼノキ、ヤブツバキ、アラカシ、ヒサカキの生育がみられました。

両地点ともいずれの種も良好な生育状態であり、今後これらの種の生育状況を継続的に監視していきます。



写真5 - 4 - 1 残存緑地の状況 (St.1)



写真5 - 4 - 2 残存緑地の状況 (St.2)

2 - 2 回復緑地

回復緑地での調査の結果を表5 - 4 - 3に示します。

その結果、いずれの種も概ね良好な生育状態であり、今後これらの種の生育状況を継続的に監視していきます。

表5 - 4 - 3 植栽樹種の生育状況

植栽位置		調査年月日	H25.11.11
		種名	活力度
遊歩道南側	1	シラカシ	1
	2	イロハモミジ	1
	3	ヤマザクラ	1
	4	エノキ (図ではヤマボウシ)	1
	5	エノキ	1
	6	コナラ	1
	7	イヌシデ	3
	8	クヌギ	1
	9	ヤマボウシ	1
	10	イロハモミジ	1
	11	イロハモミジ	1
	12	クヌギ	1
	13	コナラ	1
	14	クヌギ	1
遊歩道北側	A	クヌギ	1
	B	スダジイ	2
	C	シラカシ	1
	D	スダジイ	1
	E	アラカシ	1
	F	シラカシ	1
	G	ケヤキ	1
	H	スダジイ	1
	I	アラカシ	1
	J	アラカシ	1
	K	ケヤキ	1
	L	イロハモミジ	1
	M	ケヤキ	1
	N	マテバジイ	1
O	シラカシ	1	
平均活力度		1.1	